

南極日誌

2005(平成17)年8月29日鑑賞(ナビオ TOHO ブレックス)



監督=イム・ピルソン/出演=ソン・ガンホ/ユ・ジテ/パク・ヒスン/キム・ギョニク/ユン・ジェムン/チェ・ドクムン/カン・ヘジョン (シネカノン配給/2005年韓国映画/115分)

……韓国映画には珍しく、6人の南極探険隊員の姿を描いた骨太映画……？ その中心は隊長を演ずるソン・ガンホだが、極限状態の自然の中、彼は一体なぜ、何に挑むのか？ 仲間を失い、内部分裂の様相を呈するうち次第に、ドキュメント風の映画ながら、韓流ホラーの要素も……？ また、「到達不能点」への到達という目標も、一種のパラドックス……？ しかして、この映画のテーマは、結局は「人間の狂気」……？

美しい冒頭シーンだが……？

映画の冒頭にスクリーンに登場する南極大陸の姿は圧倒されるほど美しいもの。そして、そのバックに流れるのは、日韓のコラボレーションで実現した川井憲次氏の手による音楽だが、これが荘厳で、画面とうまくマッチしていい雰囲気……。

スクリーン上で展開される南極の美しい景色に見慣れた頃、小さな点のように連なって歩いている人間の姿が見えてくる。これが、1人重さ約100kgのソリを引きながら「到達不能点」に向かってただ黙々と歩く6人の隊員の姿。彼らに与えられた時間は60日。さて、彼らにはどんなドラマが待ち受けているのだろうか？

この映画最大のポイントはチェ・ドヒョン隊長の人間性！

この映画のポイントは、チェ・ドヒョン隊長(ソン・ガンホ)の人間性に集約される。彼はエベレスト無酸素登山の他、数々の登山および探険に成功した探険界の伝説的な人物だが、その人間性については数々のナゾがある。それを推しは

かる視点は、私の目では次の諸点。すなわち

- ①1度失敗した到達不能点をなぜ再度目指すのか？
- ②妻と離婚し、子供が自殺したのはなぜか？
- ③彼の隊員への信頼度とチームのまとめ方は？
- ④人間の根性と科学・道具とのバランス感は？
- ⑤進むべきか退くべきかについての彼の基準は？

もちろんこれが、総選挙における「マニフェスト」のように事前に明確に示されているのがベストだが、現実問題としてそれはマニフェストと同じようにそう簡単ではない。具体的にそんな局面に遭遇してはじめてチェ・ドヒョン隊長の決断が示されることになるのだが、果たしてそれは隊長に従う5人の隊員の基準と合致するのだろうか……？

チームワークが良いのは最初だけ……？

極限状態の自然には当然ながら危険がいっぱい。単に雪の上を歩いているように見えても、その雪の下にはクレバスが……？

クレバスとは、氷河が流動する際に速度の差でできた割れ目のことだが、割れ目の部分が雪に覆われて隠れている場合は大きな危険がある。

重いソリを引きながら歩いている人間の重量でこのクレバスの上に到ると、突然穴の中に突き落とされるのだから、そりゃ怖い。

最初にその危険に遭遇したのは、処女探険であり、6人の中で最年少のキム・ミンジェ（ユ・ジテ）。そして、その危機を見事に救ったのがベテランの隊長チェ・ドヒョンを中心とした5人のチームワーク。このチームワークがあれば何でも大丈夫、と思ったが……？

きしみはどこから……？

問題がない間は、仲間はみんな仲良しだが、問題が発生する中で、仲間の団結力やチームワークが試されることになるのはどの世界でも同じ。この手の探険の場合は、もともとギリギリの条件設定の中で計画を立てているのだから、1つでもその条件が変わってくると大変。たとえば、1人が病気になったからもう1度

最初からやり直して……などといかないのは当然。ところが予想しないハプニングが起こるのも、この手の探険の場合の常……？ この映画では、その第1は、ウイルスが存在しない南極で風邪に似た症状に襲われたジェギョン（チェ・ドクムン）。このジェギョンの「脱落」をめぐる、6人の集団の意識の中にあるきしみが……？

ヤン・グンチャンとイ・ヨンミンとの「対決」

ジェギョンの「脱落」そして、目標点への到達の困難性の顕著化という状況の中で生まれたのが、状況を客観的に分析し撤退を主張する若手で食事担当のヤン・グンチャン（キム・ギョンイク）と、チェ・ドヒョン隊長に盲目的に服従する副隊長のイ・ヨンミン（パク・ヒスン）との対立。意見の対立はやむをえないが、それが感情的な対立になってはダメだし、ましてや暴力を伴ったケンカとなってはナンセンス！ こんな極限状態の中で、男同士が殴り合っても仕方ないと思うのだが、そこはそれ、韩国人の国民性……？ さてその結果は……？

韓流ホラーの味つけは日誌から……？

この映画を単なる『南極日誌』ではなく、韓流ホラーの味つけ（？）としているのは、80年前に遭難したイギリス探険隊の日誌を雪の中から掘り起こしたことから。この日誌にはたくさんの絵が描かれていたが、このイギリス隊の隊員はチェ・ドヒョンたちと同じ6名。しかし、なぜか途中から1人消えて5名に。さらに、うしろ向きに座っているある人物の背中が、なぜかチェ・ドヒョン隊長にそっくり……。こりゃ一体ナニ……？ この日誌の中に描かれている絵がいつしか隊員たちの心に疑心暗鬼を生じさせ、次第に不気味な雰囲気……？ これぞ韓流ホラーの狙いどおりのストーリー展開……？

南極への韓国隊は？

南極点に世界で一番早く到達したのは、ノルウェーの探険家であるローアル・アムンセンで、1911年12月14日のこと。その1カ月ほど後の1912年1月17日には、イギリスの探険家ロバート・ファルコン・スコットも到達し、同じ1912年には日

本の白瀬探険隊も到達している。その後は、オーストラリア、イギリス、ニュージーランド、フランス、アメリカなどが次々と南極へ赴いたが、これらの南極への先陣争いの時代に、韓国が全く関わっていなかったことは、紛れもない事実。しかし、それは当然で、その時代、朝鮮半島は中国、ロシア、日本の支配下で苦しんでいたのだから。

1945年8月15日の日本敗戦の後、さらに南北分断の歴史を刻んだ韓国にとっては、南極への探険などは遠い世界だったはず。インターネット情報によれば、2003年8月6～7日にかけて南極における韓国観測隊が遭難し、1人死亡3人行方不明というニュースが流れていたが、韓国の南極での活動はその程度……？ そうだとすれば、この映画のように、韓国の南極探険隊が「到達不能点」への到達を目指したというのは、そのストーリー設定自体がかなり無理筋では……？

「到達不能点」への到達の意義は？

「到達不能点」とは、南緯82度08分、東経54度58分に位置し、どの海岸線からも最も遠い地点にある南極の一地点とのこと。そして、そこは1958年にソ連の探険隊がたった1度だけ征服したとのこと。そのためその後、「到達困難極」「到達困難点」と呼ばれることもあるとのことだが、そこは一体どんなところ……？

この映画を観る限りでは、たった1本の木が打ち立てられているだけのところだが、多分それがホントなのだろう。そうだとすると、多大の犠牲を払ってまでそこにたどり着くことに、ホントに何の意義があるのだろうか……？

ホントによくケンカする映画……？

前述のイ・ヨンミンとヤン・グンチャンとの雪の上での殴り合いのケンカを南極の自然は許さなかったのかもしれない……？ 体当たりしてきたヤン・グンチャンを一瞬イ・ヨンミンがかわしたため、ヤン・グンチャンの体重が一気に雪の上にかかったとたん、そこはミシミシと不気味な音をたてて、クレバス状態に。その結果、その穴の中に落下したヤン・グンチャンを救出しようとしたチェ・ドヒョン隊長たちだったが……？

大自然をバックとした隊員同士のケンカはこれでこりごりのはずだったにもか

かわらず、次第に装備が尽き、食糧が尽き、体力が尽きていく中、あくまで「到達不能点」への到達を主張するチェ・ドヒョン隊長の表情には次第に狂気の色が……。それを察したイ・ヨンミン副隊長も、それまでの盲目的な服従の姿勢からついに方針転換……。さらに、この映画の準主役の立場となるキム・ミンジェもなぜか雪の中に存在していた山小屋(?)の中でのチェ・ドヒョン隊長の行動を見て、チェ・ドヒョン隊長に対して殴りかかることに……。

このように、最初仲の良かった6人の隊員たちの心は次第にバラバラとなり、人間の狂気が……。それにしても、韓流映画はホントによく殴り合いのケンカをするものだと妙に感心……？

カン・ヘジョンは見せ場なし……？

この映画の登場人物は基本的に6人の隊員のみ。それ以外は、幻想的なイメージでチェ・ドヒョン隊長の子供とベースキャンプで通信を担当している女性イ・ユジン(カン・ヘジョン)がわずかのシーンで登場するだけだ。

カン・ヘジョンといえば、パク・チャヌク監督の『オールド・ボーイ』(03年)で、主役のチェ・ミンシクそしてその敵役のユ・ジテを向こうに回して堂々とした演技を見せた魅力的な女優(『シネマルーム6』52頁参照)。そして『美しい夜、残酷な朝』(04年)でも、同じくパク・チャヌク監督の下で、身体と指をピアノ線で縛られ、犯人の狂気によってその指を1本ずつ切り落とされていくという、文字どおり身体を張ったスゴイ役を熱演した女優。しかしこの映画では、このカン・ヘジョンはちょっとした「刺身のツマ」だけの役で、「見せ場なし」となっていたのは残念。まあ、この手の映画では仕方がないが……？

人気は今イチ……？

あの『シュリ』(99年)、『JSA』(00年)に主演した韓国を代表する俳優ソン・ガンホが主演した映画だが、やはりテーマが重すぎるためか、この映画の人気は今イチのよう。「TOHO プレックス」でも小さい劇場しか割り当てられていないうえ、観客も十数名だけという有り様。こりゃあまりにさびしすぎるのでは……？

2005(平成17)年8月30日記